

図書紹介

◎開発は誰のために—援助の社会学・人類学 マイケル・M・チェルニア編
“開発援助と人類学” 勉強会訳 B5版 399 pp. 日本林業技術協会 1998. 6 刊
頒価 3,500 円

本書は、1991年に世界銀行によって纏められた“Putting People First : Sociological Variables in Rural Development, 2nd edition, Oxford University Press”の日本語版(全訳)として刊行されたものである。1985年に同じ題名の初版(英文)が出版され大きな反響を呼んで以来、ペーパーバックでの再版の声が高まっていたが、その後の経験や分析を加えた第2版はその期待に応える以上のもので、新たな出版物とみることも可能な内容となっている。本書の構成は、9部14章からなり、第1章では開発協力における人間重視の視点やプロジェクトの計画・実施過程で社会学・人類学の知識を活用することの重要性が述べられ、続く第2章から11章では、世銀が支援してきた灌漑や畜産、林業など様々な分野の開発プロジェクトの問題点を生産活動と社会組織との関連において整理、明確化するとともに、問題を克服するためのアプローチを提示する試みがなされている。さらに第12章から14章では開発プロジェクトの計画、実施、評価といった過程において社会学者が果たすべき役割と貢献について、方法論も含め具体的に論じられている。各章の著者は、いずれも世界銀行の社会学分野の専門家として、あるいはコンサルタントとして、豊富な経験と知識を持つ人々である。特に編者であり第1章を書いたチェルニア氏は1974年に世界銀行が採用した最初の社会・人類学分野の専門家で、世界銀行の開発支援のあり方を、経済性・技術中心から人間(当事者)重視を加えた方向に転換させるうえで大きく貢献した人物である。また、最後の14章を執筆したチェンバース氏は、1980年代初めに開発援助のあり方に疑問を投げかけ、以来、住民参加を促進するための方法論と手法の開発に精力的に取り組んでいることで知られている。本書は開発プロジェクトの実務担当者と社会学者の2つのタイプの読者を想定して書かれており、実践的価値と学術的価値とを併せ持つ内容となっている。開発協力の実践的現場やそれを支援する研究に幅広く活用されていくことを期待したい。

(加藤 隆)